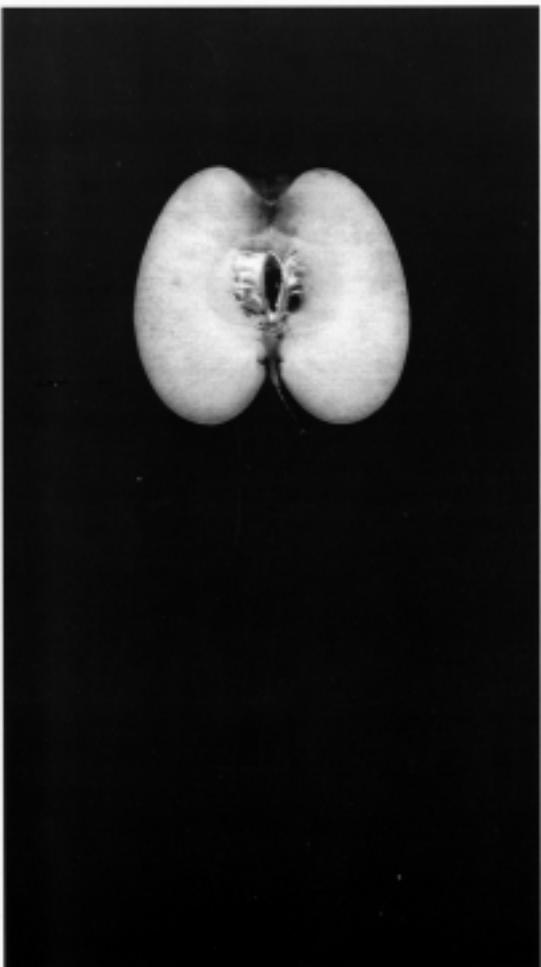


# SHUJI MIZUTOME

ベビーの環境 23 Feb—7 Mar.1998

1997ハーミット・プロジェクトNEAR THE BEGINNINGでの体験  
ボスニアのアーティスト／STAR ON THE EGG



## ボスニアのアーティスト

1997年8月、チェコの田舎町ブラシでのアーティスト・イン・レジデンスに参加した。そこは山深い小さな盆地で、最も奥地の中心に中世に建てられたという立派な修道院が、大樹の揺れる影を壁端に映して建っていた。私達は、今は廃墟となっていることで共同生活をし、陳列台が中心に並ぶ倉庫跡で制作することになった。

鮮烈な空間的印象にますます高揚する私の意識に突然ショックなニュースが飛び込んできた。ボスニアのアーティストが3人参加しているというのである。私はこの数年、死をテーマの中心に關注し、様々な無念の死とその周囲に眼差しを注いできた。特にここ2、3年は、戦争、原爆をテキストとして、生きとし生けるものの殺戮の現場を加害者と被害者の双方に向かうことによって浮上する像を、作品に定着させる作業を続けて来ていた。しかしながら私にとって様々に戦争は、やはり埋めることの出来ない距離に隔てられたあくまでもテキストとしての存在であった。ほとんど運命として戦争を知らない私が、一方、運命として無念の戦死を遂げた無数の生命へ精神を投注するには、想像力を先鋭化するしかない。無念を懷いて天と土に涙った生き物達のその瞬間の像の一つ一つを、認識可能な場へと構築することが、この数年の私の表現としての課題であった。私にとって芸術表現とは、生を常に意味あるものとして支えるものであって欲しい。その意味で説明的に、無念の死を実感することの可能な場を創設する必要が、私にはあった。

さて、ボスニアのアーティストとの出会いに戻るが、私の同心はもちろん、戦争を体験した彼等が、果たしてここで表現にどのようなスタンスを取るかということであった。ムスタファ・スボルクヤクは、戦争の悲惨をガラスや木、灰、ステンドグラスを象徴的にインスタレーションして、ダイレクトに告訴した。ミルサッド・セヒックは、ミニマル・アートを通してアーティストで、白と黒に拘泥した。塩の小山、方形に撒かれた墨の粉、燃やした木にガーゼを巻き付け箱に収めたもの、戦死者報告書を掲載する新聞をインスタレーションして、顛末を折った。オスカー・ブレバニックは、我々が共同生活した宿舎にあった自転車、屏、窓の前の猫、吊されたナップキンを写真撮影し、それを实物大に拡大コピーしたものを、实物と隣り合わせに展示した。静かな日常生活を切断したのである。この三つの表現は果たして芸術といえるのだろうか。彼等の取ったスタンスが被害者の生に裏打ちされたやむにやまれぬ選択であったことは、



展覧会のメイン会場となった中世の建物



ムスタファ・スボルクヤク／作品と作者自身  
ガラス、木、灰、ステンドグラス

それぞれの作品によってしか証明されない。

私にとって戦争はほとんど考古学的テキストであるのに対して、彼等にとっては突き放しきれない現実である。私の表現は想像力に基盤を置くのに対して、彼等は体験に支えられている。平和の純く日本において、一寸先の死を実感することは難しい。したがってダイレクトに生と向かい合う現象は、孤独になって思考の時間を自ら生み出す意志にしか訪れない。しかしながら、この肥大化した経済システムの一員として翻弄される我々にとって、自己の内部を探求する投光器とタイムテーブルの開発が急がれている。一方、死の影を必死に潜り抜けたボスニアのアーティストは、今なお、死く自らの間に耐えながら、目撃した死の像と生の姿を歴史として定着すべく格闘しているのであろう。日本の現実もボスニアの現実も共に他人事ではない。

混乱の街に戻った三人は今、現実に向けてどういう作品を志向しているのだろうか。そして当然、同じ問いが私自身にも向けなければならない。今や跡形もなく原子に分解された無念の生きとし生けるものの身体に眼差しを固定してきたが、しかし、「Near the Beginning」を振り返る私の意識が転回しているを感じる。つまり、ボスニアの3人が選んだそれぞれの手段、即ち、告訴、道羅、切断が、むしろ芸術に向けて試されたとすれば、彼等の想像と切実が疎いほど伝わってくるのである。均質で、かつシステム化された時間に追い立てられている日本で、常に切実な精神を持続していくことは簡単なことではない。ボスニアのアーティストの現実に触れて、常にアートのベースであるべき切実を突きつけられたのである。私の意識はこれまで外に向かっていた。生が、死が、いつも物語、あるいはイメージとして、身体化され隠蔽されていく。世界が、物語とイメージのアラベスクに変容され装飾化されていく。表面のイメージとイメージの隙間に意識を集中し、そこに疊ぐものを認知していくことで、世界を解体していくことが私の精神を支えてきた。しかし、そういう観察者としての知覚がいかに緻密になり得ようとも、私は機械ではない。自己という鏡の内側に、まさに切実があったのを気付かされた。とりえず、理不尽な死という闇から切り離され遠ざけられた生に、身体の奥底から打ち寄せる衝撃波に向けて意識構造の変革を迫られている。たとえば、アナロジー変換によって身体の暗闇に揃えた様々な道具、天秤、振り子、スイッチ、メス、スプーン、『欲望の機械』等々をX線透視してみなければならない。



エルサッド・セニック  
ライト、塀、樹木、砂地、ガーゼ、新聞紙



オスカーピレバニック  
自転車、コピー

## STAR ON THE EGG



星宿 星宿の卵



STAR ON THE EGG 部分

STAR ON THE EGG インсталляшн 1990  
Планшеты/чеснок  
ミニランプ、ガラス、コットン、綿、紙、木材

宗教的精神は、光を舞台の上に造形することによって、闇を聖なる世界へと昇華させた。静かに燃え続ける氷結された炎は、初めて闇に中心を定位した。静謐な宇宙に目を閉じた人間は、完全に闇と融合し、自己存在と対峙することになった。そして独立が始まり、そこに瞑想というクリアーな時間が生まれた。次に科学的精神性は、橈能の光の後に電気振動の光を発見する。それは闇を制するパワーを内在していた。ラディカルな精神は見えないものにあらゆる方向から光を当て、世界の構成説明の可能性を見た。そして既にその光は死神の原子核にまで到達した。ところが、ここで一つの開拓的な躍進が起きた。あの大戦のビリオドとしてヒロシマの空上に炸裂した原爆は、神の光に匹敵するスケールであった。

美術史はいつも光の歴史との轟轟の中に展開した。私はこの中世の修道院の地下墓庫で、ピカと表現された第三の光をテーマに選んだ。初めて闇に中心を定位した。考古学的感覚とミクロの想像力で探査する。燃え切れない生き物が、ピカを浴びた。小さな物ほど、柔らかい身体は一瞬にして高麗に消えた。妊娠、胎児、胚子、精子の像を透明なガラスの小さな破片に描写し、それにミニランプの一点光源を反射する。科学の光のエキスギーを吸収した生命像が拡大されて、闇に沈む理由に投影される。光皮無限の大光と無数の日輪の衝突は、死の歴史に大きな意味を付け加えた。鏡の背骨を透かしてブランクタリウムになった原爆ドームは、明らかに原爆崩壊を告発している。星雲に切り取られた線形の上に、闇に消えた命の一つ一つを描い上げなければならない。鉛で作った小さなスプーンの彫刻はその道具である。葡萄、木の葉、水滴、涙、芽、精子はそれぞれにスプーン型である。私は中世以来のこの闇の空間に、闇光が一瞬写し出した絶滅の影象を再現し、ここを宗教、科学、アートが乱反射する場としたかった。

木屋周二 星宿 1990 玻璃吹き生まれ

個展

1980 「空間の星」 0108美術 (東京) コバヤシ画廊 (東京) 1981 0108美術 (東京) 1982 0108美術 (東京) 1985 美術ペルルギ (東京) 1986 美術ペルルギ (東京) 1987 美術ペルルギ (東京) 1988 美術ペルルギ (東京) 1989 ギャラリー・ナーヴ (東京) 1990 「星のアーティスト」ギャラリー・ナーヴ (東京) 1991 ギャラリー・ナーヴ (東京) 1992 「Space has History」ギャラリー・ナーヴ (東京) 1993 「紀元の星」ギャラリー・ナーヴ (東京)

グループ展

1987 「美術と復興」木屋周二・佐藤利一 二人展 コバヤシ画廊 (東京) 1988 「あらはれ」千葉県立美術館 (千葉) 1984 「古・日本」千葉県立美術館 (千葉) 「同時代性の発展」東洋美術研究会 (横浜) 「太古城下都市遺跡」太古資料館地下展示施設 (横浜) 1985 「アーティスト」千葉県立美術館 (千葉) 「木版画二ノ丸美術館」二ノ丸美術館 (千葉) スコット・エーサンズ・ギラード (千葉) 「大前田下美術館」大前田美術館地下展示施設 (横浜) 「桂由美」美術ペルルギ (東京) 1986 「桂由美的世界」美術ペルルギ (東京) 「桂由美アート・フェスティバル」美術ペルルギ (東京) 「桂由美アート・フェスティバル」木屋周二美術館 (横浜) 1991 「Asakusa」ペルルギ・現代美術交流展」0108美術小学校 (東京) 「Orientation '93 "Nord Japan" ペルルギ・現代美術交流展」サンセント・スル・博物館 (アムステルダム) 「桂由美二ノ丸美術館」二ノ丸美術館 (千葉) 1992 「星B」Compound ギャラリー・ナーヴ (東京) 1993 「星Bのヨハネスブルク」ギャラリー・ナーヴ (東京) 「星の内面空間」木屋周二・上原 二郎・桂由美 ギャラリー・ナーヴ (東京) 1995 「My House is Your House」ギャラリー・ナーヴ (東京) 1997 「Near the Beginning」0108美術館 (千葉) プラザ銀座 (千葉)

GALLERY 〒101 東京都千代田区麹町2-12-2 遠近ビル4F Tel.03-3261-2581 Fax.03-3261-2582 Watanabe Art IF, 2-2-13, Kasumigaseki-chome, Chiyoda-ku, Tokyo 101

http://www.cabinet.ne.jp/galerie\_e-mail+super@erinet.ne.jp 電話: サカヘ吉田美術会社 〒171 東京都新宿区西早稲田1327 Tel.03-588-1711 Fax.03-588-0490